

コラム 人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

なぜ、子ども達は学校に来ているのか？

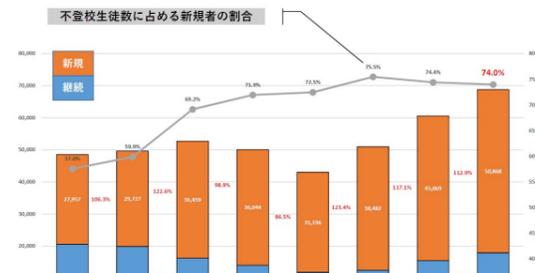
令和5年度の問題行動等調査によると、小中学校の不登校児童生徒約35万人のうち、その年度に新たに不登校になった児童生徒は約18万人で不登校児童生徒の約半数近く（令和3、4年度は半数以上）になります【図2】。毎年5万人のペースで急増している要因とも言えます。高等学校の場合、単位の関係で在学が継続しにくいという特性はありますが、同じ考え方をとるならば、3/4が新規になります【図3】。



不登校児童生徒の半数が「新たな不登校」※

※不登校児童生徒数から「不登校の状況が前年度から継続している児童生徒数」を引いたものを、小学校1年生は前年度の状況が不明のため「新たな不登校」としている。
文部科学省 児童生徒の問題行動・不登校等 生徒指導上の取組に関する調査に基づき算出

【図2】 不登校児童生徒数の推移 (全国小中学校)



Q. 学校行事を児童生徒のアイデアや主体的な取組で活性化することが、魅力ある学校につながるのではないのですか？

A. 学校行事を児童生徒に委ねるなど、特別活動のあり方を見直すことも非常に効果的な魅力づくりです。確かに、そのような活動を通して、児童生徒は学校生活を自分ごととして考え、より良くしていく体験を通じて、「みんなで何かをするのは楽しい」「学校は楽しい」と感じるようになります。

こういった児童生徒主体の学校づくりというアプローチは、既に多くの学校で取り組まれ始めています。

「魅力ある学校づくり」とは？

「魅力ある学校づくり」という言葉の歴史は意外にも古く、平成28年の不登校に関する調査研究協力者会議の答申¹⁾で、不登校児童生徒への支援のあり方として「第5章 学校における取組」の最初に「1 不登校が生じないような学校づくり等」「(1) 魅力あるよりよい学校づくり」として次のように述べられています。

学校における不登校への取組については、児童生徒が不登校になってからの事後的な取組に偏っているのではないかという指摘もある。児童生徒が不登校にならない、魅力ある学校づくりを目指すことが重要である。具体的には児童生徒にとって、「自己が大事にされているか」、「自分の存在を認識されていると感じることができるか、かつ精神的な充実感を得られる心の居場所となっているか」、さらに、「教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で共同の活動を通して社会性を身に付けるきずなづくりの場となっているか」、「学校が児童生徒にとって大切な意味のある場となっているか」等について問い直すなど、魅力ある学校づくりを目指すことが求められている。全ての児童生徒にとって、学校が安心感・充実感を得られる活動の場であることが重要である。

1) 「不登校児童生徒への支援に関する最終報告」下線追記

児童生徒の主体的な取組は有効

日々の教育活動で、子ども達が何を感しているか？

もちろん「問い直す」のは教職員です。言い換えれば魅力ある学校づくりを行う主体は、児童生徒だけでなく教師でもあるということになります。

今日の授業が、子ども達にとってどんな場になっていたか？答申に書かれていたような授業になっていなかったとしたならば、教師の側が授業（指導）のあり方を見直し、改善する。そういう作業が魅力ある学校づくりの中核なのです。



『提要』のダウンロードはコチラ

魅力ある学校になるための二つの仕掛け

図1は、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが示す「魅力ある学校づくりのための二つの仕掛け」です。この仕掛けを行っていく際の留意点は、児童生徒集団の状態を十分理解した上で、適切なタイミングで仕掛けを行うことにあります。

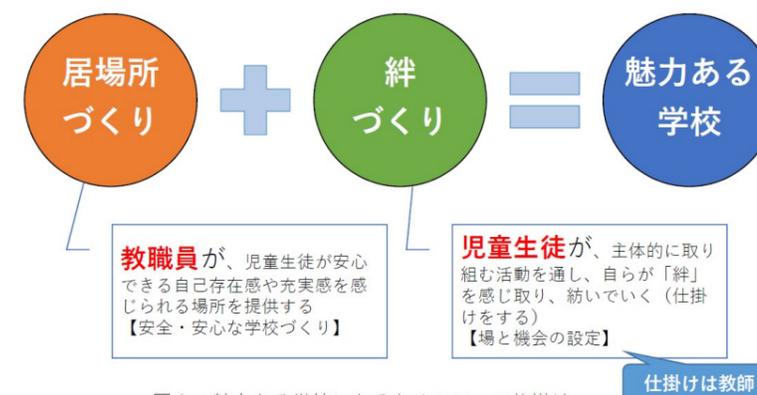


図1 魅力ある学校になるための二つの仕掛け

例えば、年度初めなどでクラス替えがあった場合、集団が安定する5月くらいまでは居場所づくりに力点を置き、徐々に絆づくりに移行していくことが必要です。また、学年途中で集団が不安定になった時は、再度、「居場所づくり」に取り組む。バランスをとりながら粘り強く、継続的に取り組む姿勢が必要です。

集団の状況を捉える児童生徒理解が基盤

POINT

魅力ある学校づくりとは、

- ① 教職員の側が自らの教育活動を問い直す作業
- ② 「居場所づくり」と「絆づくり」のバランスが大切